

第 65 回 SGRA-V Forum

第 5 回「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」Online 会議

◆「19 世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」



自由討論コメント

1. 許 泰玖 (カトリック大学)
2. 孫 衛国 (南開大学)
3. 鄭 潔西 (寧波大学) (当日欠席)
4. 段 瑞聡 (慶應義塾大学) (コメントは日本語)
5. 彭 浩 (大阪市立大学) (コメントは日本語)
6. 八百啓介 (北九州市立大学)
7. 平山 昇 (神奈川大学)
8. 向 正樹 (同志社大学)
9. 大久保健晴 (慶應義塾大学)
10. 大川 真 (中央大学)

許泰玖 (カトリック大学校)

Huh, Tae-koo 허태구

제5회 〈한국·일본·중국 간 국사들의 대화 가능성〉 원탁회의는 19세기 동아시아에서의 전염병 유행과 사회적 대응'이란 주제로 개최됩니다. 이번 회의에 제출된 박한민(朴 漢珉), 이치카와 토모오(市川 智生), 위신종(余 新忠) 세 분 선생님의 논문은 저에게 현재의 코로나 바이러스 팬데믹(pandemic) 상황과 관련하여 많은 것을 느끼고 생각하게 해주었습니다. 국경을 초월한 치명적 전염병의 유행이 개항장·개항지라는 특수한 공간에서 위생·방역 대(對) 행정권·주권의 충돌이라는 결과를 초래한 점도 흥미로웠고, 전염병 극복과 대처라는 주제를 탐구할 때 한 사회의 전통적 요소와 근대적 요소를 같이 고려해야 한다는 논점도 재미있었습니다. 무엇보다 전염병을 초래한 세균과 바이러스가 인간이 유사(有史) 이래 설정한 모든 인위적 구분과 차별-국경, 인종, 민족, 빈부(貧富)-을 초월하거나 무력화했고, 그 결과 공동의 대응을 가져왔다는 점에 주목할 필요가 있다고 생각합니다. 역설적이게도 세균과 바이러스의 눈에는 모든 인간이 평등한 하나의 숙주에 불과하였던 것입니다. 유사한 맥락에서 아쓰미국제교류재단 글로벌연구회(SGRA)가 지속적으로 주최해 온 원탁회의가 한국·일본·중국 간의 역사 대립과 갈등을 무력화하거나 완화하는 촉매가 되기를 기원합니다.

第5回、〈日中韓・国史たちの対話の可能性〉の円卓会議は、「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで開催されます。今回の会議に提出された朴漢珉先生、市川智生先生、余新忠先生の論文は、私にとって、現在のコロナウィルスのパンデミック(pandemic)状況と関連して多くのことを考えさせるものでした。国境を越えた致命的な伝染病の流行が、開港場・開港地という特殊な空間において、衛生・防疫 対 行政権・主権の衝突という結果をもたらした点も興味深かったし、伝染病の克服と対処というテーマについて探求する際に、一つの社会の伝統的要素と近代的要素を一緒に考慮しなければならないという論点も興味深かったです。何よりも、伝染病をもたらした細菌とウィルスが、有史以来、人間が設定してきたあらゆる人為的区分と差別——国境、人種、民族、貧富を超越もしくは無力化し、その結果、共同の対応をもたらした点に注目すべきだと思います。逆説的にも、細菌とウィルスにとってはあらゆる人間が平等な、一つの宿主に過ぎなかったのです。類似した脈絡において、渥美国際交流財団SGRAが持続的に進めてきた円卓会議が、日中韓の歴史的対立と葛藤を無力化し、緩和させる触媒になることを願います。

非常高兴能够再度参加渥美财团组织的中日韩三国国史对话会议，本次主题是“19 世纪东亚传染病的流行和社会对策”。尽管是网上参会，但是依然能够感受到这次对话会议的学术意义与现实价值。本人尽管对医疗疾病史并不在行，但对于大家的论文还是非常感兴趣。拜读三篇主题报告之后，结合时下的新冠抗疫形势，谈几点个人看法。

第一，时当新冠肆虐的当下，这次会议的召开正当其时。而三篇主题报告恰好又都是讨论中日韩三国由传统过渡到现当代时期，在三国所发生的疫情及各自的应对。尽管余新忠教授讨论的问题更为宏观些，而朴汉珉与市川智生两位先生则都是讨论 19 世纪后半期朝鲜与日本应对疫情的做法以及政府的应对办法，讨论的问题都有一个由传统到现代的变化，在面对疫情威胁时，三国在社会机制方面的变化及其效果。其中涉及很多问题，医疗技术、政府管理、社会动员等等方面，为我们当下应对新冠疫情，提供很多可以参照的因素。

第二，从三国近代应对疫情来看，其中最为重要的因素并不是医疗技术，或者药物等方面，反而可能是社会应对的机制，国家动员的力量。瘟疫的流行，跟一般的疾病还是有很大不同，因为其流行快，致病广，相对于“治病”来说，“预防”更为重要。如何调动社会的力量，尽可能将疫情控制在一定范围内，不至于迅速扩大，是抗疫成功最为关键的办法。无论是发生在仁川的鼠疫，还是发生在日本各港口城市的瘟疫，都是如此。在当下面对新冠大流行的时代，我们身处这样一个历史时期，看到西方很多发达国家像美国、英国、法国等，在预防方面做得都很不成功。中国吸收早期不够重视预防的教训，经过几个月的严防死守，加上积极而有效的治疗，终于将其控制住，充分说明预防、隔离是阻断瘟疫流行最有效的办法，绝不可以麻痹大意。

第三，在三篇主旨报告中，当东亚三国在近代面对疫情之时，在现代防疫体系建立过程中，都有一个向西方学习的过程。在这个过程中，西方各国是东亚三国的老师，是被学习和模仿的对象。而当今在面对新冠疫情之时，东亚三国的处理办法普遍比西方发达国家要好，这样也就带来一个新的思考问题，影响这种差别的具体原因何在？是否跟儒家注重集体利益，在面对大是大非面前，更能够牺牲个人自由以服从更大的需要有关？还是有其它政治社会方面的原因。

第四，三篇主旨报告，都是以国别为单位讨论的 19 世纪防治传染病的办法，但从其中我们也看到日本与朝鲜的关联性。在地域性的传染病防治中，动员一个地域、一个国家即可以。但诚如威廉·麦克尼尔说过

在公元纪年开始之际，全球就形成了“四个疾病圈”，而在全球化的当下，随着交通的便捷，地域性的传染病能够很快就形成全球性的。第一次世界大战时期的大流感、随后的禽流感、艾滋病和当下的新冠疫情，都是这样世界性的传染病，在防治过程中，如何加强国际性的合作，更是成功与否的重要一环。

最后，借用威廉·麦克尼尔在《瘟疫与人》一书最后一段话说：“假如我们能像了解过去那样，努力地预测未来，那么，对传染病的影响就绝不能置之不理。技能、知识和组织都会改变，但人类面对疫病的脆弱，则是不可改变的。先于初民就业已存在的传染病，将会于人类始终存在，并一如既往，仍将是影响人类历史的基本参数和决定因素之一。”^①这似乎是个预言，当下全球性新冠疫情的蔓延与肆虐，正是这句话最好的注脚。也充分说明如何应对传染病的爆发与流行，将伴随着人类的未来，相信人类最终会战胜新冠疫情。即便如此，今后还会有新的疫情发生，关键是如何形成一套行之有效的社会预防体系，而且这种预防更具有国际性，各国如何有效的合作，更是防止这种世界性传染病的关键。

2021年中・日・韓国史対話会議 自由討論コメント

孫衛国（南開大学歴史学院）

この度、渥美財団が主催する中日韓国史対話の会議「19世紀東アジア感染症の流行と社会対策」に参加できて、嬉しく思います。オンライン会議にもかかわらず、今回の対話会議から学術的意義と現実的価値を感じました。私自身は医療研究にあまり詳しくないですが、皆様のご研究に関心を持っています。三人の先生のご高論を拝読した後、私は現在新型コロナの対策情勢と結び付けて、自分の意見をお述べさせていただきます。

第一に、新型コロナに襲われている現在、今回の会議が開催することができてちょうどいいと思います。この三つの発表は中日韓三国が伝統から現代に移行した過程において、発生した疫病と三国の対応について討論したものです。余新忠教授が議論している課題はよりマクロで、朴教授と市川教授は共に19世紀後半の朝鮮と日本の疫病対策と政府の対応策を議論しました。伝統から現代への変化に着目するところに共通性が見られます。具代的に言えば、疫病の脅威に直面した三国の社会メカニズムの変化と効果が

^① 威廉·麦克尼尔：《瘟疫与人》第六章《近代医学实践的影响：1700年——》，余新忠、毕会成译，北京：中信出版集团，2018年，第237页。

見られる問題です。この課題は医療技術、政府管理、社会活動など多くの問題が含まれており、現在新型コロナウイルスの対応に、参考になると思います。

第二に、近代三国の疫病対策から見ると、最も重要な要素は医療技術や薬などではなく、むしろ社会対応のメカニズム、国が動員する力です。疫病の流行は、一般的な病気と大きく異なり、流行が速く、病原が広いため、「病気を治す」よりも「予防」の方が重要です。どのように社会の力を生かし、できるだけ疫病を限られる範囲に抑え、急速に拡大しないことは、疫病対策の最も成功且つ重要な方法です。仁川で発生したペストも、日本の各港町で発生した疫病もそうです。新型コロナの流行に直面している現在、私たちは、アメリカ、イギリス、フランスなど西洋の多くの先進国が疫病予防の面で成功していないのを見ました。中国は早期に予防を重視する教訓を吸収して、数ヶ月徹底的な死守を経て、また積極的かつ有効な治療を加え、ついに疫病を制御するようになりました。予防と隔離こそ最も有効な方法で、油断してはならないことを十分に説明してくれました。

第三に、この三つの発表では、東アジア三国が近代的疫病に直面したとき、防疫システムの構築が西洋から学ぶ過程でもあります。その過程において、西洋諸国は東アジア三国の教師であり、学習と模倣の対象です。しかし、現在、新型コロナウイルスパンデミックに直面しているとき、東アジア三国の処理方法は普遍的に西洋先進国より優れていて、これも新しい問題を考えさせるようになりました。つまり、この違いに影響を与える具体的な原因とは何か？ 儒教が集団の利益を重視し、大きな是非に直面する時、より大きなニーズに従うために個人の自由を犠牲にできるかどうかと関係がありますか？ それとも他の政治社会的な理由と関わっていますか。

第四に、この三つの発表は、いずれも国を単位にして19世紀の感染症の予防を議論しました。その中から日本と朝鮮の関連性も見られます。地域性の伝染病予防には、一つの地域、一つの国を動員すればよいです。しかし、ウィリアム・マクニールが言ったように、紀元の初め、世界は「四つの病気圏」を形成したが、グローバル化の現在、交通の便利さに伴い、地域性の伝染病はすぐに世界に広がります。第一次世界大戦中の大インフルエンザ、その後の鳥インフルエンザ、エイズ、現在の新型コロナウイルスパンデミックなどは世界的な伝染病であり、それらを予防治療する過程において、どのように国際的な協力を強化するかは、成功できる重要な一環です。

最後に、ウィリアム・マクニールは『病疫と世界史』という本の最後、このように言いました。「過去を

知るように未来を予測できれば、伝染病の影響は決して無視できない。技能、知識、組織は変わるが、人類は疫病に直面した時の脆弱性は変えない。初民就業より先に存在していた伝染病は、常に人類のなかに存在し、これまでのように人類の歴史に影響を与える基本的なパラメータと決定要因の一つになるだろう。」これは、現在の世界的な新型コロナウイルスパンデミックの広がりや暴力が、この言葉の最高の脚注であることを予言しているようです。病疫の爆発や流行にどう対処するかも十分に説明しており、人類の未来に伴い、人類は最終的に新型コロナウイルスパンデミックに打ち勝つと信じています。それでも、今後、新たな疫病が発生する可能性があります。重要なのは、どのようにして有効な社会予防システムを形成するかということです。そして、この予防はどのようにより国際的で、各国の間有効に協力し、伝染病を防止するかということも重要です。

我对朴汉珉先生的大作比较感兴趣，特别是 1886 年仁川港的临时检疫规定在日本的行政程序感兴趣。这里看起来像一个现代的行政审批程序。我将根据论文，将这个程序梳理了一下，不知道是否有理解错误的地方。在此基础上我想提几个问题。行政程序是否包括这 7 个步骤。(1) 仁川日本领事和各国领事会议，制定临时检疫规定，(2) 该临时检疫规定先提交仁川海关长（代理）史纳机，史纳机同意，以“海关长公文”形式即行生效，(3) 仁川日本领事将检疫规定向居留仁川日本人公示，即是立即执行该规定的意思，汇报本国将于 7 月 15 日实施应该是要求日本政府予以追加的意思，(4) 日本代理公使高平小五郎在此次制定、实施检疫规定时的影响或作用如何？仁川领事铃木充美是必须经由高平之手方可将检疫规定上达外务大臣井上馨，还是仅需参考高平意见而直接将检疫规定上达井上？(5) 外务大臣井上馨提出的以公使之名义颁布和实施检疫规定的处理方案，事实上是认可该检疫规定，(6) 日本内阁最初也是同意了井上馨的方案，亦即大体上同意了该检疫规定。(7) 但问题出在内阁发训令给公使执行时，仁川方面其实已经下令执行。最终的结果是，日本内阁虽然同意了检疫规定，但因为仁川方面在实施方面过早执行该规定，系“越权”行为，是否是该“越权”行为引起日本内阁“不快”，使得内阁出于“面子”原因而撤销对该检疫规定承认？

霍乱是急性传染病，犹如突然爆发的战争，将军在外面打仗时尚且“君命有所不受”，霍乱发生时，相关的责任人（譬如仁川领事铃木充美）必须迅速应对方能掌握主动权，事实上铃木在当时也做到了这一点，但日本政府的这套层层上达、下传的复杂行政程序，在时效上无疑有其弊端，而其最终撤销对该检疫规定的承认，似乎也有不近人情的地方，不知道后果如何？日本内阁对这场霍乱的大流行是否负有一定的责任？

还有一点，日本内阁撤销对检疫规定的承认，是否是日本官僚系统的特色？还是当时各国政府的普遍情况？同样是关于该临时检疫规定，在仁川的日本领事、清国领事和美国、英国领事均达成了一致，认为应该马上付诸。不知道后来在清国朝廷和美国、英国内阁是否发生过如同日本一样的问题，即因为执行过早而不被追认？

段瑞聡 (慶應義塾大学)

Duan Ruicong ダン・ズイソウ

2020年に全世界に蔓延しているコロナ禍は、人類社会にはかり知れない危機をもたらしている。如何にしてこの危機を乗り越えることができるか、人類社会の未来にかかっている。ここでいくつか卑見を述べておきたい。

第1、自国の感染拡大を抑えるだけでなく、他国に拡散させないためにも、各国指導者のリーダーシップが問われている。各個人もそれぞれ自らの行動に自覚を持つべきである。

第2、ワクチン開発などにおける国際協調、グローバルな情報の共有が必要不可欠である。これこそ人類社会にかかわる人間の安全保障問題である。

第3、第一線で戦っている医療関係者と科学者への敬意と感謝の気持ちを常にもつことである。

第4、感染者と社会的弱者への差別をなくし、積極的に救いの手を差し伸べることである。

第5、ポジティブシンキング (positive thinking) が必要である。コロナにより、人々の移動が制限された。しかし、Zoonなどを用いて、オンライン授業ができ、他地域あるいは外国の研究者との交流がむしろ簡単にできるようになった。リモートワークによって、紙の消費が減り、結果的に森林伐採の減少、環境の改善につながると考えられる。何よりも、このコロナ禍は、人々に一度立ち止まって、いかにして自然と共生できるかを考えさせるきっかけになったのではないかと思う。

단 루이충 (段瑞聡, 게이오의숙대학)

2020년에 전세계적으로 만연하고 있는 코로나 사태는 인류 사회에 헤아릴 수 없는 위기를 가져왔다. 어떻게 하면 이 위기를 극복할 수 있을까. 인류 사회의 미래가 걸려 있다. 여기서 몇 가지 비견(卑見)을 적으려 한다.

첫째, 자국의 감염 확대를 방지하는 것 뿐만 아니라 타국으로 확산시키지 않기 위해서도 각국 지도자의 리더십이 문제가 되고 있다. 각각의 개인도 자신의 행동을 자각해야 한다.

둘째, 백신 개발 등의 국제 협조, 글로벌한 정보의 공유가 필요불가결하다. 이야 말로 인류 사회와 관련된 인간의 안전 보장 문제이다.

셋째, 일선에서 싸우고 있는 의료 관계자와 과학자에 대한 경의와 감사의 마음을 항상 가져야 한다.

넷째, 감염자와 사회적 약자에 대한 차별을 없애고, 적극적으로 구조의 손길을 내미는 것이 중요하다.

다섯째, 긍정적인 생각(positive thinking)이 필요하다. 코로나 사태로 인해 사람들의 이동이 제한되었다. 하지만 Zoom 등을 이용해서 온라인 수업이 가능해졌고, 타지역 또는 외국의 연구자와의 교류가 오히려 간단히 이루어지게 되었다. 리모트 워크로 인해 종이 소비가 줄었고, 결과적으로 삼림 채벌의 감소, 환경 개선으로 이어질 것이라고 생각된다. 무엇보다 이번 코로나 사태는 한 번 멈춰 서서 사람들이 어떻게 하면 자연과 공생할 수 있는지를 생각하게 되는 계기가 되지 않을까 생각된다.

彭浩 (大阪市立大学)

Peng Hao 호우·코우

疫病の歴史を振り返ると、よく知られている事実としては、中世後期のヨーロッパでは、ペストが長きにわたり断続的に流行していたことが挙げられる。ヴェネツィア・マルセイユのような、人の出入りが激しい港湾都市・商業都市が最も感染を受けやすいところであり、疫病対策として人の移動への制限を余儀なくされたが、内陸の都市や農村部より人の移動への依存度が高いため、感染のリスクを最大限に抑えるうえで人の移動を認める対策づくりに必死であった。それを背景に、14世紀後期、諸港湾都市において、感染地域から来航する船に対して乗船のまま一定期間で隔離する措置を採りはじめた。それが現代につながる入国検疫制度の起源と言われている。さらに、移動する度に隔離・検疫を求められるのを避けるため、隔離後にヘルス・パス(健康証明書、Health Pass)を発行する制度も導入された。ヘルス・パスの広範囲の使用はまた近代的なパスポート制度を受容しやすい環境を提供したと考えられる。

さて、制度の革新という視点から質問したい。報告を聞いて、19世紀後期東アジアにおけるコレラの感染拡大が日本・朝鮮の検疫制度の生成、あるいは言い方を変えれば、検疫制度の近代化に大きな影響を与えたという印象を受けた。ここで確認したいのは、その時のコレラ対策は日中韓三か国にとって検疫制度の創設の契機となった、と考えてよいかどうかという点。さらに、その時、海外から制度を移植したり、または制度創設の参考にしたりすることもあったかという点である。具体例に即して説明してもらえばありがたい。

자유토론자 평 하오(彭浩, Peng Hao, 오사카시립대)

역병의 역사를 뒤돌아 봤을 때, 중세 후기 유럽에서 페스트가 긴 세월 지속적으로 유행했다는 것은 잘 알려진 사실이다. 베네치아 마르세유와 같이 사람들의 이동이 많은 항만 도시, 산업 도시가 가장 감염되기 쉬운 곳이었으며, 그렇기 때문에 역병 대책으로써 어쩔 수 없이 사람들의 이동을 제한했다. 하지만 내륙 도시나 농촌보다 사람들의 이동에 대한 의존도가 높았기 때문에 감염 리스크를 최대한으로 억제하기 위해 사람들의 이동을 허용하는 대책 만들기에 필사적이었다. 이를 배경으로 14세기 후기 여러 항만 도시에서는 감염 지역으로부터 내항하는 배를 승선한 채로 일정 기간 격리하는 조치를 취했다. 이것이 현대의 입국검역제도의 기원이라고 한다. 또한 이동할 때마다 격리 및 검역의 대상이 되는 것을 피하기 위해 격리 후에 헬스 패스(건강증명서, Health Pass)를 발행하는 제도도 도입되었다. 광범위한 헬스 패스의 사용 또한 근대적 여권제도를 수용하기 쉬운 환경을 제공했다고 생각된다.

제도의 혁신이라는 시점에서 질문하고 싶다. 논문을 읽고, 19세기 후기 동아시아에서의 콜레라의 감염 확대가 일본, 조선에서의 검역 제도의 생성, 달리 말하면 검역 제도의 근대화에 커다란 영향을 끼쳤다는 인상을 받았다. 여기서 확인하고 싶은 것은 당시의 콜레라 대책은 한중일 삼국의 검역 제도 창설의 계기가 되었다고 생각해도 되는 것인지, 또한 당시 해외로부터 제도를 이식하거나, 혹은 제도 창설에 있어 그것을 참고하거나 하지는 않았는지 궁금하다. 구체적인 예를 들어 설명해 주셨으면 한다.

八百啓介 (北九州市立大学)

Yao Keisuke

市川報告と朴報告はともに居留地と国内社会という二元的空間を取り上げているが、アジアにおいては「コレラと向き合う」ことが「近代もしくは欧米と向き合う」ことであったように思う。まさしく市川報告からは、日本と朝鮮との違いは不平等条約の条約改正が「出来た日本」と「出来なかった朝鮮」に帰結するように思われる。だとすれば日本側の積極的な防疫対策が条約改正を容易にした側面はないのかを伺いたい。

朴報告は日本領事が各国の領事館と協議はしたものの本国からの訓令を待たずにコレラ防疫の検疫規則を制定しようとした仁川、朝、清、日三国の官吏間で検疫規則のための共助が比較的円滑になされた元山、日本領事館が各国の領事館との協議をせず一方的に検疫規則を施行しようとした釜山を三者三様に考察している。1895年の乙未事変や1928年の奉天事件にみられる「現地の暴走」との関連で興味深かった。ただし分析が日本の外交史料に依拠していることから日本人官吏の「活躍」に偏重しているのではないかという若干の疑問が残る。

近代とは国家が「衛生」によって国民の身体を支配するようになった時代である。余報告は近代における国家と民衆との統治関係において衛生防疫が重要なファクターであったという論点であるものの、奥武則氏や福士由紀氏のように日本や中国における「医療の論理」と民衆による「伝統社会の倫理」の対立関係からの視点とは異なっている。ただしアジアにおける「伝統的治療」と「近代衛生制度」の融合の可能性は中国に限ったことといえるのかという疑問が残る。

야오 게스케(八百啓介, 기타큐슈시립대)

이치카와 선생님과 박한민 선생님의 논문은 거류지와 국내 사회라는 이원적 공간을 다루고 있는데, 아시아에서 '콜레라와 마주하는 일'이 '근대 혹은 구미와 마주하는 일'이었다는 생각이 든다. 이치카와 선생님 논문에서는 일본과 조선의 차이는 불평등조약의 조약 개정이 '가능했던 일본'과 '불가능했던 조선'으로 귀결되는 듯 하다. 그렇다고 한다면 일본측의 적극적인 방역 대책이 조약 개정을 쉽게 한 측면은 없었는지 여쭙고 싶다.

박한민 선생님 논문은 일본 영사가 각국의 영사관과 협의는 했지만 본국으로부터의 훈령을 기다리지 않고 콜레라 방역의 검역 규칙을 제정하려고 했던 인천, 조선, 청국, 일본 삼국의 관리 간에 검역 규칙을 위한 공조가 비교적 원활하게 이루어졌던 원산, 일본 영사관이 각국의 영사관과 협의하지 않고 일방적으로 검역 규칙을 시행하려고 했던 부산에 대해 각각 고찰하고 있다. 1895년의 을미사변이나 1928년의 봉천사건에 나타나는 '현지의 폭주'와 관련해서 흥미로웠다. 다만, 분석이 일본 외교사료에 의거하고 있는 점에서 일본인 관리의 '활약'에 편중되어 있는 것은 아닌지 약간의 의문이 남았다.

근대란 국가가 '위생'을 가지고 국민의 신체를 지배하게 된 시대이다. 위신중 선생님의 논문은 근대 국가와 민중과의 통치 관계에 있어 위생 방역이 중요한 요소였다는 것이 논점이지만, 오쿠다케노리(奥武則)나 후쿠시 유키(福士由紀)의 일본 및 중국의 '의료의 논리'와 민중에 의한 '전통사회의 윤리'의 대립 관계라는 시점과는 다르다. 다만 아시아에서의 '전통적 치료'와 '근대 위생 제도'의 융합 가능성은 중국에 한정되는 것인지 의문이 남는다.

平山 昇（神奈川大学）

Hirayama Noboru

◆感染症＝「国史」をこえざるをえないテーマ

感染症そのものは人類にとってたいへん困ったものですが、歴史研究の対象としては、これほど面白いものはないと思われ知らされました。なぜなら、三人の先生方の報告から、日本・中国・韓国（朝鮮）といった近代国家の枠組みでの理解がまったく通用しない歴史像がみえてくるからです。

【朴漢珉報告】と【市川智生報告】から、朝鮮の中央政府が統一的な開港場の防疫規則を整備していなかった段階では、それぞれの開港場ごとに外国官吏と現地官吏と居留民社会の協力関係のあり方が異なり、それによって対策の状況が異なっていた、だからこそ、感染症対策をする現場での国をこえた協力という点では、「日本の開港場／朝鮮の開港場」という違いよりも、「横浜・神戸・長崎・元山 / 仁川・釜山」の違いの方が際立っていた、ということがみえてきました。

また、同じ日本の領事館でも、朝鮮官吏側と事前協議をせずに一方的に規則を提示して摩擦が生じた釜山日本領事館と、朝鮮・清国との協議・共助を可能にした日本領事館とでは、大きく異なっています。

未体験の感染症対策に直面した19世紀東アジアの開港場は、日本／朝鮮／清国といった国家の制度的枠組み（居留地制度など）よりも、それぞれの開港場ごとの人的ネットワークや医療・衛生インフラといった個別要因によって規定される面が大きかったということがみえてきたと思います。19世紀の感染症対策の歴史は「いやでも国史をこえた視野をもたざるをえない」ということを痛感しました。

なお、【余新忠報告】は、今回は広い視野から概括したもので、中国の個別の開港場の事例紹介はありませんでしたが、やはり朝鮮や日本のように開港場ごとに大きな差異が生じたのでしょうか？

また、【3人すべての報告者】にお尋ねしたいのですが、東アジアにおける居留地のメディアによる情報伝達はどのように機能したのでしょうか？ 討論者の塩出先生は東アジアの国が異なる居留地（上海―横浜など）のメディアのあいだで相互参照や議論の連環があったと明らかにされています。1886年のコレラのように、国境に関係なく広がっていく感染症への対策において、他の居留地の情報はきわめて重要な役割を果たしたのではないのでしょうか？

◆それぞれの伝統社会の価値観にとって、「感染症で死ぬ」ことの意味とは何だったのか？

【余新忠報告】で、「疫病に感染することは自らの天命とみなされていたため、疫病を予防する方法は真剣に考えられてきませんでした」「伝統的要素とその影響力もあることを無視すべきではありません」と指摘されています。たいへん重要なご指摘だと思います。

現代の価値観では、「感染症で死ぬ=避けるべきこと」でしょう。しかしながら、近代科学・医学が広く一般庶民にも「当然の規範」として定着する前は、違う世界観がありました。そのような「伝統(前近代)社会の価値観」と感染症対策との遭遇や相克について考える必要があると思います。「伝統(前近代)」と書きましたが、そのような価値観は現代世界にとっても無縁なことではありません。

日本の事例を紹介します。私は正月の初詣(新年参拜)の研究をしています。今年の正月は新型コロナのために戦後始めて初詣客が激減しました。しかし、約100年前の「スペイン・インフルエンザ」のときは、まったくといっていいほど例年とかわらずに多くの人々が神社仏閣に初詣でつめかけました。正月ではありませんが、「スペイン風邪にかからないように社寺に祈願しに行く人々で、電車が満員」ということもありました。すでに政府や知識人によってマスク着用や密集回避など近代科学にもとづいた対策が指示されていたのですが、多くの庶民はそれに従うよりも、「密」になってでも社寺に参詣しました。この背景には、「病気になったら祈祷・祈願する」という伝統的行動様式と、乳幼児死亡率の高さなど「死」がごく身近であったことが考えられます。

歴史的にみて、それぞれの地域、それぞれの時代のそれぞれの人びとにとって、「感染症で死ぬ」とはどういうことだったのかという意味を、現代的な先入観をなるべく取り払って見つめなおすことが、歴史学として必要だと考えます。

히라야마 노보루(平山昇) 코멘트

◆감염병 = ‘국사’를 넘지 않을 수 없는 주제

감염병 그 자체는 인류에게 굉장히 곤란한 것이지만 역사 연구의 대상으로서는 이만큼 재미있는 것도 없을 것이라고 생각하게 되었습니다. 왜냐면 세 분 선생님들의 논문에서 일본, 중국, 한국(조선)이라는 근대 국가의 틀로는 이해가 전혀 되지 않는 역사상(像)이 보이기 때문입니다.

【박한민 선생님 논문】과 【이치카와 선생님 논문】에서는, 조선의 중앙 정부가 통일적인 개항장의 방역 규칙을 정비하지 않은 단계에서는 개항장 별로 외국 관리와 현지 관리, 그리고 거류민 사회의 협력 관계 방식이 서로 달랐고, 그로 인해 대책 상황이 달랐다. 그래서 감염병 대책을 하는 현장의 국가를 넘는 협력에서 ‘일본의 개항장/조선의 개항장’이라는 차이보다도 ‘요코하마, 고베, 나가사키, 원산/인천, 부산’의 차이가 더욱 뚜렷하게 나타난다는 점을 알게 되었습니다.

또한, 같은 일본 영사관이라고 해도 조선 관리 측과 사전 협의를 하지 않고 일방적으로 규칙을 제시해 마찰이 생겼던 부산의 일본 영사관과 조선, 청국과 협의, 공조가 가능했던 일본 영사관과는 크게 다릅니다.

이전에 경험하지 못한 감염병 대책에 직면한 19세기 동아시아의 개항장은 일본/조선/청국이라는 국가의 제도적 틀(거류지 제도 등)보다도 각 개항장의 인적 네트워크나 의료, 위생 인프라와 같은 개별 요인으로 인해 규정되는 면이 컸다는 점도 알게 되었습니다. 19세기 감염병 대책의 역사에 대해서, “싫어도 국사를 넘는 시야를 가질 수밖에 없다”라는 것을 통감했습니다.

또한 【위신중 선생님 논문】은 넓은 시야에서 개괄한 것인데, 중국의 개별적인 개항장의 사례 소개는 하지 않으셨지만 중국 역시 조선이나 일본과 같이 개항장 별로 큰 차이가 있지 않았을까요?

그리고 【세 분 모두】에게 여쭙고 싶습니다만, 동아시아의 거류지 미디어의 정보 전달은 어떤 식으로 가능하고 있었나요? 토론자이신 시오데 선생님은 동아시아 국가에서 서로 다른 거류지(상해-요코하마 등) 미디어 간에 상호 참조 및 논의 연환(連環)이 있었다는 것을 밝히셨습니다. 1866년의 콜레라 처럼 국경과 상관 없이 확대되는 감염병 대책에 다른 거류지의 정보는 굉장히 중요한 역할을 하지 않았을까요?

◆각자의 전통사회적 가치관에서 봤을 때, ‘감염병으로 죽는 것’은 어떤 의미를 지니고 있었나요?

【위신중 선생님 논문】에서 “역병에 감염되는 것은 스스로 천명이라고 생각했기 때문에 역병을 예방하는 방법을 진지하게 생각해 오지 않았다” “전통적 요소와 그 영향력이 있었던 것도 무시해서는 안 된다”고 지적하고 계십니다. 굉장히 중요한 지적이라고 생각합니다.

현대의 가치관에서 보면 ‘감염병으로 죽는 것=피해야 할 것’이겠지요. 하지만 근대 과학, 의학이 널리 일반 서민에게 ‘당연한 규범’으로 정착하기 이전에는 다른 세계관이 있었습니다. 이러한 ‘전통(전근대)사회의 가치관’과 감염병 대책과의 조우 및 상극에 대해서 생각할 필요가 있다고 생각합니다. ‘전통(전근대)’이라고 적었습니다만, 이러한 가치관은 현대 세계와도 무관한 것이 아닙니다.

일본의 사례를 소개하겠습니다. 저는 정월 하쓰모데(初詣: 신년 참배) 연구를 하고 있습니다. 올해 정월은 신형 코로나 바이러스로 인해 전후 처음으로 하쓰모데를 한 사람들이 굉장히 줄었습니다. 그런데 약 100년 전 ‘스페인 독감’ 때는 예년과 다르지 않게 많은 사람들이 신사 또는 절로 하쓰모데를 갔습니다. 정월은 아니었습니다만, “스페인 독감에 걸리지 않도록 신사, 절로 기원하러 가는 사람들로 전철이 만원”이 된 경우도 있었습니다. 이미 정부나 지식인들이 마스크 착용 및 밀집 회피 등의 근대 과학에 기초한 대책을 지시하고 있었지만, 많은 서민들은 이에 따르기 보다는 ‘밀집(密)’하게 되더라도 신사나 절에 갔습니다. 이러한 배경에는 ‘병이 들면 기도, 기원한다’고 하는 전통적 행동 양식 또는 유아 사망률이 높았던 것처럼 ‘죽음(死)’이 굉장히 가까이 있었다는 것이 있었습니다.

역사적으로 봤을 때 각각의 지역, 각각의 시대, 각각의 사람들에게 ‘감염병으로 죽는다’는 것이 어떤 의미였는지를 현대적인 선입견을 되도록 개입시키지 않고 바라보는 것이 역사학으로서 필요하다고 생각합니다.

向正樹（同志社大学）

Mukai Masaki

3人の先生方の発表はいずれも、国や地域の障壁を超えた協力によってコレラに対処する姿が描かれたと思います、とても有意義な歴史の発掘であったと思います。一方で、コレラの脅威が、国や地域の分断というか、人と人の境界線を深めるような方向に働いた、ということはありませんでしょうか。今回の新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中でも、同様に国を超えた協力関係（EU圏内における医療崩壊した国の患者の受け入れ）が多くみられると同時に、様々な局面で国と国、人と人の分断（例：欧米におけるアジア系への偏見など）を招いてしまっている例もみうけられます。

19世紀末というのは、日中韓の三国にとって今日へとつながる民族意識の形成期にあたると思います。日本・中国・韓国の民族意識の形成がコレラの流行と関係している可能性について、発表者の先生方は何かご意見があるでしょうか？

例えば、日本では、間接的ながら、コレラの流行と民族意識との間には関係が見られたと思います。明治日本において、元福岡警察署長の湯地丈雄や洋画家矢田一嘯という人物が中心となって博多に「元寇記念碑」を建設する計画が進められ、20世紀初頭に完成を見ました。湯地らの活動には、いわば過去の「蒙古襲来」の歴史記憶を呼び覚まし、外国に対する危機意識を高めることで日本人の民族意識の強化を図るという狙いがありました。湯地の念頭にあったのは、先進的な海軍を建設しつつあった清国でした。そのような折、1886年に二つの事件が起こります。一つは長崎事件（長崎に上陸した清国水兵と現地の警察とのあいだに起こった事件）、そして、もう一つは、博多でのコレラ流行です。湯地は福岡警察署長として、コレラの対応にあたりましたが、多くの人々がコレラにかかって倒れる様を見て、かつて博多を襲った「蒙古襲来」の光景を想起し、「元寇記念碑」運動を決意したと言います。ただし、湯地以外の日本人が皆そのように感じていたわけではなく、「元寇記念碑」運動に対して冷ややかな日本人も多かったとされています。湯地に賛同した矢田が描いた油絵「蒙古襲来絵図」を効果的に用いて全国募金行脚を続け、1904年に「元寇記念碑」が完成します。この運動を通じて、徐々に日本国民の民族意識が刺激され、高められていったと考えられます。

大久保健晴（慶應義塾大学）

Okubo Takeharu

※メールから

なお、文章は（おそらく想定されているものよりも）長くなっているかもしれませんが、当日、決してそのまま読み上げるわけではございません。

あくまでも自由討論の「文章」としての提出であり、指定の時間や許される状況の枠内で、適宜、発言させていただく所存です。

私は、日本とオランダとの関係を機軸とした東洋政治思想史・比較政治思想を専門に研究しています。そこで、政治思想史の観点から、質問をさせていただきます。

(1) 主権的権力と公衆衛生について

このたびのコロナ禍において、何人かの政治学者が疫病の蔓延との関係で注目した古典に、ホッブズの『リヴァイアサン』があります。カルロ・ギンズブルグらの図像研究が明らかにするように、著者ホッブズの指示のもと版画家アブラハム・ボスが描いた『リヴァイアサン』の有名な扉絵には、疫病・ペストの防疫にあたる二人の医師の姿が小さく描かれています。17世紀、イングランドをはじめ、ヨーロッパはたびたびペストの感染拡大による被害に襲われました。特にホッブズがオックスフォード大学に入学した1603年は、ペストの大流行の年でした。ホッブズの『リヴァイアサン』に示されるように、人々が疫病におびえ、死への恐怖をいだくなかで、主権的権力はその存在感を増し、その存在意義は際だったものとなります。

それは、政府・国家権力が公衆衛生の名のもとに、緊急事態宣言やロックダウンを発令し、人々の行動の自由を制限する現代社会も同様です。

公衆衛生と主権的権力の行使は、密接不可分な関係にあり、疫病の蔓延という状況はまた、主権的権力とは何かを考えるためのきわめて重要な機会でもあります。

とりわけ本日のご報告が、コレラの流行を主題として19世紀後半はまた、東アジアにおける近代国家形成期でもありました。東アジアにおいても、疫病の蔓延に対応する公衆衛生の確立と、近代国家としての主権的権力の形成は、密接不可分であったと言えます。

以上の問題関心から、それぞれのご報告に対して一つずつ質問します。

【朴漢珉先生のご報告に対して】

朴先生のご報告では、1880年代終わりの朝鮮の三つの開港場において、特にコレラ予防の検疫を実践する日本領事との、行政権を巡る主導権争いと協調について検討されました。特にレジユメの8ページでは、釜山港において居留地の感染症の流行を防ぐという理由で、日本の官吏が朝鮮の人々の上位に立って監督し統制することは、「自国の主権の侵害」であると考えられた、という議論がなされています。

そこで私がお聞きしたいのは、当時の朝鮮において、どこまで「主権」の観念が形成され、意識されていたのかという点についてです。

19世紀後期の朝鮮外交は、属国自主ともいわれるように、旧来の東アジア国際秩序における清朝中国との事大主義を基礎にしながら展開されたといわれます。実際、本日の朴先生のご報告の中でも、外国として主に登場するのは、清朝中国です。果たして、開港場におけるコレラ予防の行政権を巡って、日本と対峙したとき、当時の朝鮮政府はどこまで独立した近代国家として、主権的権力のもとに公衆衛生を実現しようと考えていたのでしょうか。それともそこに存在していたのは、旧来からの朝鮮との事大主義を守り抜きたい清朝中国と、条約外交によって東アジアに新たな国際秩序を確立したい日本との間の、外交上の綱引きであったと考えるべきなのでしょうか。お教えいただけますと幸いです。

【市川智生先生の報告について】

続いて市川先生のご報告に対しては、質問というよりも感想とコメントになります。このコメントを聞いて、市川先生がどのようにお考えになるか、お話しいただけますと嬉しく思います。

私が市川報告で興味深かったのは、日本の開港場では、当初は居留地に住む西洋列強の住人が衛生会議などの自治組織を作って対応したが、しかしドイツでコッホのもとで学んだ北里柴三郎らが先端的なヨーロッパの細菌学研究を日本に持ち帰り、公衆衛生行政にあたるなかで、日本側による一元的な統治が実現した、というご指摘です。

私は幕末明治期の明治政府による土木技術政策、シヴィル・エンジニアリング、とりわけ河川や水利事業について研究していますが、そこでも同様の出来事を見ることが可能です。この点について、私は次のように考えています。

19世紀後半の東アジアにおいて、ヨーロッパ諸国の租借地になった上海・大連・膠州湾・広東・香港は、列強の「非公式帝国」の中継点として発展しました。そこには本国から植民地官僚のエリートが、確固とした人材登用システムのもとに派遣されました。しかし日本は、他のアジア諸国とは異なり、欧米列強の植民地や半植民地にはなりません。そのため明治政府は、ヨーロッパ諸国の軍事・土木技術の導入や国際港の築港、国内交通の整備など、全て自らの財源で負担しなければなりません。そこで明治政府が、その担い手として招聘したのが、いわゆるお雇い外国人たちです。彼らのなかには、世界中の植民地を渡り歩く、経験豊かな「帝国の技師」や優れた学者もいました。また、日本の学問や科学技術の近代化に大きく貢献した人物もたくさんいます。しかし総じて言えば、本国から遠く離れた極東の国に雇われてやってきた彼らは、決してヨーロッパで超一流の学者や技術者であったわけではありません。それ故、明治10年代になると、むしろ明治政府のもとでヨーロッパ諸国に派遣され、そこで数年間留学して、西洋の最先端の学問技術を身につけてきた日本の留学経験者たちの技能の方が勝っていくこととなります。その典型的な一例が、北里柴三郎でした。

このようにみますと、明治日本は、西洋諸国に多くの留学生を派遣し、西洋の最先端の法学や医学、科学技術、統治論を摂取することによって、日本の居留地に滞在する西洋人との行政権争いを優位に進め、主権的権力を確立することができたといえます。すなわち、近代日本は、留学生を通じて西洋の最先端の学知を積極的に受容することによって、その地理的な偏差を活かして、東アジアにおける西洋列強の勢力と対峙し、主権的権力としての独立を維持できたと考えられます。

このような解釈について、市川先生はどのように考えられるのでしょうか。

【余新忠先生の報告について】

余先生のご報告では、19世紀から20世紀中国における公衆衛生観念の発達と衛生防疫システムの変容について光が当てられました。余先生はご研究のなかで、清朝前期の伝統的な衛生観念と清末の近代的な衛生観念の連続と不連続について指摘されました。よく知られるように、「衛生」の語はもともと『莊子』に由来し、これを幕末期の蘭学者・長与専斎が近代的な意味で読み替え、翻訳語として定着した言葉です。

しかしここで私がお聞きしたいのは、「公衆衛生」というときの「公衆」の観念です。英語で公衆衛生は Public Health ですが、果たして19世紀後期、清末の衛生行政において、この「公衆」public は、どのような存在と範囲で考えられたのでしょうか。

先にも指摘したように、公衆衛生行政は主権的権力の観念と密接不可分であります。公衆衛生システムの「近代的発展」を問うためには、果たして清朝末期において、政治の主権的権力が具体的にどの範囲まで及ぶと考えられていたのか、それはチベットやモンゴルも含むのか、またその対象となる自国の民、国民とは具体的には誰であったのか、どのような範囲が想定されていたのか。この問題は、近代中国における国民意識の形成とも深くかかわります。この点について、余先生の見解をお聞かせいただけますと幸いです。

(2) 公衆衛生と民衆の反応について

第2番目の論点は、政府の国家権力の行使によって実施される公衆衛生行政に対して、民衆の反応がどのようなものであったのかについてです。例えば、明治期の日本では、コレラ患者は避病院へと隔離されました。するとそれに対して「彼ら患者は西洋式病院で、西洋人の医者により、生きた状態で肝・肝臓が奪い取られ、その臓器は海外に売り払われる」といった噂、流言飛語が飛び交いました。こうしてコレラへの恐怖はまた、明治政府の公衆行政や西洋の異人への敵視と結びつき、それはコレラ一揆へと発展していきます。

このように、目に見えない疫病・感染症への恐怖は、様々なうわさやフェイク・ニュースを産出し、それが民衆を極端な行動へと駆り立てたり、人々の間に分断や差別を生み出したりします。これは、現代社会でもなお見られることです。

今回の共通テーマには「社会的反応」という言葉が入っていますが、3名のご報告者のペーパーでこの問題に明示的に言及されているものはなかったように思います。もし可能であれば、19世紀の朝鮮、日本、中国、それぞれにおいて感染症の流行と防疫の実施が、民衆の間にどのような反応を生み、政府や学者がそれにどう対応したのか、それぞれの報告者からお話しをお聞きできると幸いです。

以上

大川真（中央大学）

Okawa Makoto

（※年末から体調を崩し、5日まで入院をしており、退院後も体調が万全でないため、コメントを提出できず、失礼しました。はじめにお詫びしておきます。）

私から発表者・コメンテーターの皆様へ提出したいことは、感染症流行と政治批判の関係です。

「疫」という訓義は、死者のタタリがもたらす病気という意味です。特に東アジアにおいては、政争で横死した王族や貴族の霊が、タタリとして感染症をもたらすと古くから信じられ、感染症対策として、タタリをなしている死者の霊を慰撫することが求められてきました。その例として、日本では東大寺を中心とした鎮護仏教や平安の御霊信仰などが展開されてきました。また政争でなくなった死者を弔うことは、現在の政権に一定の批判や牽制を促すことにつながります。このことは医学が発達する近世以降も言えるかと思います。

19世紀の東アジアでも、たとえば余新忠先生の報告では、感染と天命と結びつける民衆の心性が指摘されています。これは広く言えば、天譴説の亜種として捉えられましょう。

今回のコロナ禍でも、ドイツの哲学者であるマルクス・ガブリエルが、経済至上主義がもたらしたグローバル化と、狭隘な自国中心主義が感染拡大をもたらしており、新たな人間観の構築が必要であると説いています。またデモクラシーやリベラリズムについても根本的な問い直しが必要な事態となっています。

こうした視座のもと、あらためて19世紀東アジアにおいて感染症の流行が、それぞれの国民にどのような政治意識の変化をもたらしたのか（あるいはもたらさなかったのか）をお聞きしたいと思います。